

# 倉橋先生

齋藤文雄

およそ子供に關係のある仕事をするには本来子供が好きでたまらないといった方々が良い仕事をしているようである。その人の學問・地位などは二のつぎである。ところがわが倉橋先生にいたっては、學問の深さも地位も御立派だったが、それを動かす源動力ともいふべき「子供ずき」は根本的なものでとても理窟では表わせない。先生の本来のこの「子供ずき」が結局先生を偉大な存在にしたといつてもいいように思う。

昭和十九年といへば戦争もかなりおしつまってすべてが窮乏な時代であったが、先生はそれでも子供のことで頭が一杯だった。女高師の生徒の乳児保育の実習場を作ろうということとで文部省を動かし、学校から十五分ぐらいのところに疎開

で空家になった幼稚園があったが、それを買いとられた。先生といつしよに二度も三度も足をはこんで、この部屋は何にこの部屋は何にと計画をねって、不自由な中を徐々に整備していった。先生はわがことのような欣び方で細かいことまで氣を配られ、漸く昭和二十年度からは、実習もできそうな見通しもついたのであったが翌年の空襲で無惨にも灰と化した。あれが残っていたらお茶の水大学の学生はどんなに助かったことかと心残りがするが、先生にその後お会いした時、こう申された。「焼けてしまったけど私はよくよくない。倉橋が生きている限りは頭の中にどうしてもまた作ってやろうという意志だけは存在しているからね。君にまた片棒かっいでもらう日が早く来てほしいな」と眼を細めて語られた。

先生のお孫さんが三つぐらいの時わたしたちの病院に健康相談に来れたことがあった。その時は先生御夫妻がおつれになった。孫というものはただもう理窟なしに可愛いものである筈であるが、先生の可愛がり方は暖い理性がとけこんだ愛情で無遠慮に申上げた私たちの意見もよく聞き届けて下さった。細かい言葉のやりとりを書くほど、紙数が許されていないが、この時も先生の御人格に驚かされた私であった。

先生は恩賜財団母子愛育会の設立当時から理事として私たちの仕事に大きな貢獻をされた方である。当時の常務理事齋藤守閑氏は先生とは中学時代からの級友であった關係もあつ

て会のためには随分御世話して下さい。終戦後常務理事は他界され、先生は御健康が勝れず、足場のわるい愛育会にも御姿を見せなくなれたが、それでも何かという御心にすることが多かった。

おやじというものは、動けなくてもいい、口がきけなくてもいい、ただ生きていてくれさえしたら私たちは安心していられる。そのおやじのひとりをつ失ったことは私個人としても寂しい限りであり、愛育会の将来のためにも大きな打撃である。先生の偉大な霊におすがりして、将来を開拓してゆくの私が私たちの責務である。

(愛育病院長)

## 恩師倉橋先生を

### しのぶ

武田雪夫

今でも私は、中野のお宅へ伺ったら、あの温顔で、「ねえ

武田君」と、声をかけて下さりそんな気がしてならない。「先生の亡なれたという事が、まだ夢の様で、実感としてせまって来ないのである。私は、これから、先生の恩顧と追憶の二十年にも余る長いフィルムを、くりひろげて見たいと思う。あの慈父にもまさる、やさしさのこもった温顔を目の前に浮かべながら。

×

先生のお宅の二階のあの角のまるい敷物をしいたお室である。窓から茂った青葉がのぞいていた。

今後、幼児のための童話のために専心しようとお話した私に、先生は、しずかに、こんなことをいわれた。それは、今も、はつきり私の心に残っている。

「君が、幼児童話に精進する気持は、全く壮とするよ。幼児童話は、容易の様でいて実は、むずかしいものだからね」

「幼児童話は、作意が濃すぎては、幼児の心理に適しないし」といって、あまりうすければ、全くよろこばれない。いわば、無技巧の技巧だね。だから、ただ努力と苦心だけで、よき幼児童話を作り得るとは限らない。もちろん不意な思いつきなどで、幼児をたのしませ、よろこばすことなど出来ないね。こう考えると、年長の子供の童話に比して、幼児童話の少いのは当然といえるよ」

そういつて先生は、机の上にのっている、お目にかける、